

後世に残るもの

(1991年6月課長会議説明要旨)

社長 伊室一義

藤沢周平さんの傑作時代小説「三屋清左衛門 ^{みつや せいざえもん ざんじつろく} 残日録」は、家督をゆずり隠居となった元 用人（会社でいえば元 専務取締役というところか）三屋清左衛門が、もう ^{かかわ} 拘りのないことと思いつつも、長年奉公を続けた〇〇藩に巻き起こる権力闘争に、次第に巻き込まれていく様を描いたなかなか面白い小説である。本筋からはちょっと外れるが、こんな挿話に出くわして私はあっと、思った。

三屋家の菩提寺から先祖の百年忌の供養をする気持ちがあれば、法事の手配を致しますよ、という通知が来る。仏の戒名は「清光信女」俗名「かな」というが、清左衛門にはとんと憶えがないという ^{くだ} 件りである。

「百年前の仏はいかにも遠い死者だった。その存在は模糊として歳月の彼方に紛れて、どのような ^{うつ} 現し身の姿も思い描くことは出来ない。生前の父母や祖父母からも百年前の仏にかかわりがあるような話を聞いた記憶はいっさいなかった」

よくは分からなかったが、その仏様が供養を望んでいるような気がして、ともかく法事を営むという筋立てであるが、この話は私の関心と呼ぶのである。

「百年経ったとき、子孫は私のことをどれだけ憶えてくれているだろうか？」と考えると全く自信がない。人生は川の流れのようなもので、自分という存在は一滴の水に過ぎない。それはときに ^{しおき} 飛沫となって、一時は人の目に留まることはあっても、所詮は忘却の彼方へと消え去っていく。

会社の仕事もその大部分は F L O W（流れ）で、S T O C K（蓄え）の部分というのは意外に少ない。日常こなしている仕事の流れを決して軽視してはならないが、後に何にも残らないというのでは些か寂しいのではないだろうか？ いや、意識的に後世に残るような仕事を一つでも多く仕遂げることが出来れば、生きてきた意義も実感出来よう、というものである。決意と努力によって、Y - T E C が S I 企業としての認定を獲得するのも、立派な後世への S T O C K となるし、F L O W の仕事でも目標を掲げてそれに挑戦し、見事にそれを達成したときは、レコードとして後に残ることになる。その様に考えると、記録を留めておくための会社の歴史、「社史」を作ることの大切さが理解されるだろう。

こんな事を考えながら新聞の番組欄を眺めていると、今年はモーツァルト没後 200 年というので、「モーツァルト・オン・ツアー」などという記事が目飛び込んでくる。よく注意して見ると、毎日のようにモーツァルトの音楽が電波に乗って世界中を飛び交っている。生誕 200 年記念の 35 年前にはこれほどでも

なかったのに、今や犬も歩けば「モ」の字に当たる大フィーバーである。なかには、「悪乗りする奴がいるのはけしからん！」と悲憤慷慨ひふんこうがいなさる方もおられるが、日本で、ウィーン・フィルハーモニーがモーツァルトを演奏するとなると、先ず切符は手に入らないというのが現状である。難しい事は別にしても彼の愛好家が世界中で年々増えている事実は、モーツァルトの後世に残した音楽が、実に偉大であったと言える何よりの証拠ではなかろうか。

ところで、35年間の短い人生で、626もの珠玉の名曲を作ることが出来た本当の秘訣は何か？彼が仕事をした環境は、果たしてどんな処であったのか？そんな秘密に接したくて、私はウィーン、ザルツブルク、ミュンヘン辺りにまで出かけて行ったのである。



(ホーエンザルツブルク城)

★ 天才を育てた環境

ザルツブルクはヨーロッパの中心、それはスイスとスラヴ諸国の間、北ドイツとイタリアとの間に位置している。二つの小高い丘に囲まれた小さな市街の中心をザルツァッハ川が流れている。中世風に密集した家並みの間にそびえる大聖堂の円蓋、さらにいくつもの教会や尖塔。後ろのメンヒスベルクの丘を見上げると、そこには数百年を経たホーエンザルツブルク城が要塞のような偉容を誇っている。

古城から見おろす市街の眺めはなんと優美なことだろう。川向こうにはミラベル宮殿の陽気なロココ風の庭園が見える。1756年1月27日、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトはそんなザルツブルクで産声を上げたのであった。



(モーツァルトの生家)

いかに稀有^{けう}の天才といえども、その才能を引き出し、育ててくれる人がいなくては、容易に開花出来るものではない。レオポルト・モーツァルト、音楽教育にかけては当時この人の右に出る者はいないといわれたこの父に、我々は感謝を捧げなくてはならない。「ヴァイオリン教程」という優れた手引き書が完成した年に、モーツァルトが生まれたのも幸せであった。父はヴォルフガングよりも五つ年上の娘ナンネルにクラヴィア（初期のピアノ）を教えているとき、クラヴィアをいじって離れようとしぬ息子の才能に目をつけ、本格的な指導をするようになる。この猛烈な教育パパは、のちに息子の探してきた結婚話に猛反対したり、何かとやかまし過ぎるところもあったが、この父にしてこの子あり。実にキメの細かいアドバイスと、適切な配慮があったればこそモーツァルトの才能が花開いたものと断言出来る。当時の交通事情を考へても、度々のウィーン、ミュンヘン、イタリア行きには、並々ならぬ決断と勇気が必要だったろうと推測される。

★ 旅に学ぶ

一乗寺の決闘では、あれほど評判の高かった吉岡道場の高弟が無名の旅武芸者宮本武蔵に次々と倒されていく。井の中の蛙では強くなれないのである。

狭いザルツブルクでは、息子を大成出来ないことを知っていたレオポルトは、モーツァルト6才のとき、ミュンヘンへ連れて行って、選帝候（神聖ローマ帝国の皇帝を選ぶ権利のある有力な王様）の前で、御前演奏をさせている。手ごたえ充分と見たレオポルトは、続いて首都ウィーンへ向けて出発する。一家総出の旅に明け暮れる年月の始まりであった。神童モーツァルトの評判が評判を呼んで、ウィーン到着後一週間で、女帝マリア・テレジアの前でピアノ演奏が許される。



（シェーンブルン宮殿）

シェーンブルン宮殿でのこの破格の待遇、普通の人なら些か固くなるころであるが、6才のモーツァルトは天真爛漫、女帝の首に抱きついてキスしたというから周りの人はさぞ驚いただろう。宮殿の床で滑って転んだとき、助け起こしてくれた皇女マリー・アントワネットに「大きくなったら君をお嫁さんにしてあげるよ」と宣うたのだから相当の強心臓ではある。（マリー・アントワネットは後のため後にルイ16世の王妃となり、フランス革命で断頭台の露と消える）ウィーン旅行で自信を深めたレオポルトは、半年もしないうちに今度は西に向かう。めざす都はパリやロンドンである。大抵のことには感心しないパリの王侯・貴族も、幼い天才の演奏にはすっかり心を奪われる。5カ月間の滞在後ロンドンへ。市民層が政治や文化の担い手となりつつあった、進んでいる街ロンドンでの公開演奏会では、大勢の一般市民が駆けつけ、レオポルトは驚くほどの入場料収入を得る。

父の病気のためロンドンに1年半滞在した少年モーツァルトは、あの大バッハの息子クリスティアン・バッハと巡り会って大きな刺激を受けた。音楽のメッカイタリアで長く学び、すでに高いレベルと名声を勝ち得ていたクリスティアン・バッハは20才年下のモーツァルトに好意を寄せ、オペラを初めとするイタリア音楽の様式を教えてくれる。このときに学んだものが、モーツァルトの生涯を通ずる音楽様式の核となるのである。オランダやパリに立ち寄り故郷に帰り着いたとき、ヴォルフガングはすでに10才になっていた。さらに、二度目のウィーン旅行の後、レオポルトは13才の息子連れて今度はイタリアへ向かう。

18世紀のヨーロッパでは、音楽の本場といえばそれはイタリアだった。宮廷の音楽家はイタリア人が主力で、モーツァルトがいくら天才でも、有力な宮廷で作曲家として就職するのは容易ではなかった。「ヴォルフガングが音楽家として栄達の道を進むためには、ぜひともイタリアで学び、イタリアで認められて箔^{はく}をつけさせなくてはならない」少し回り道になるが、レオポルトの作戦は緻密で、それは着々と成功への道を歩んで行くように見えた。

最初の大都市ミラノでは、翌年の謝肉祭のためのオペラを作曲する契約を結ぶことが出来たし、ボローニャでは音楽理論と作曲の大家 マルティーニ神父から対位法の指導を受けている。14才の少年作曲家は複雑な作曲技法をいとも簡単に習得して神父を驚嘆させた。モーツァルト父子はローマに着くと、カトリックの総本山ペテロ大聖堂を訪れる。レオポルトの妻宛の手紙には、得意満面の笑顔が投影されているではないか。

「ヴォルフガングはドイツの貴族に見られました。王子だと思った人もいたくらいです。……お前はたぶんローマのあの有名なくミゼーレ<のことは何度も耳にしたことがあるだろう。たいへん尊いもので、破門されたくなかったら、パート譜ですらも写譜したり門外に持ち出してはならない、という秘曲です。ところがなんと私達はもうそれを持っている。ヴォルフガングがそれを聴いて、すっかり書き写してしまったのです。……」

ローマからナポリに足をのばし、1カ月余りのんびり過ごして、再びローマに戻ってみると、思いがけない朗報が待ち受けていた。教皇クレメンス14世から音楽家として最高の名誉である「黄金拍車勲章」が授けられたのである。大きな栄誉は帰途訪れたボローニャでも与えられた。音楽団体「アカデミア・フィラルモニカ」の正規会員としての認定である。今や少年モーツァルトは、名実ともに一流の音楽家となっていた。華々しい成功の連続であった栄光の旅から帰って、家族や友人に語るイタリアのみやげ話は、さぞや弾んだことであろう。

その後も二度三度とイタリアを訪ねることになるが、三度目の行き先はミラノで就職が目的であった。そしてこの町のために書いたオペラ「ルーチョ・シッラ」が、フェルディナント大公臨席の下に上演されたので、大公が宮廷音楽家として雇ってくれるものとばかり思っていたが、実は、女帝マリア・テレジアが邪魔を入れたために、この期待は裏切られる。息子のフェルディナント大公に宛てた女帝の手紙は次のようなものであった。

「無用な人間は雇わないようにしなさい・・・乞食のように世の中を渡り歩いているような人達は、家臣達にも悪い影響を与えます・・・」この手紙はその後もモーツァルトの就職活動の前に、大きく立ち塞がる。



(女帝マリア・テレジア像)

挫折もまた人を育てる教師になる。モーツァルトの音楽は生来の明るさに次第に深味を加えていく。それにしても、10年以上にわたる旅また旅の連続、馬車に揺られ通して休む暇もなかった生活は、健康にも悪い影響を与えたに違いない。

しかし、この幼年時代からのヨーロッパ遍歴の大旅行がなければ、あの比類なきモーツァルトの音楽は決して生まれなかったであろう。彼はパリから父親に宛てた手紙の中で言っている。「僕は断言しますが、旅をしない者は実に哀れむべき存在です。凡庸な人間なら旅をしようとしまいと、所詮は凡庸のままでしょう。しかし優れた才能の持ち主は、いつも同じ土地にいたら駄目になってしまいます」

★ 逆境にめげないプロ根性

ザルツブルク東南30^{ほど}km、静かな湖の辺りに佇むフッシエルホテルは、きっとここを訪れる人を魅了するだろう。新緑の向こうに端正な姿を見せるこの建物は、ザルツブルク大司教の狩の館で、これはもう映画サウンド・オブ・ミュージックの世界である。



(ホテル・シュロス・フッシエル)

前後三度に及ぶイタリアの旅から故郷に帰ったモーツァルトは、ザルツブルクの宮廷音楽家として勤めることになる。ザルツブルクは今でこそオーストリアの一都市であるが、昔はローマ法王庁の治める由緒ある直轄領で、ローマ教皇に任命された僧籍を有する王侯が大司教と呼ばれて統治を続けてきた。大司教は妻帯出来ない筈であったが、ミラベル宮殿という立派な館に然るべき女性を住まわせていたし、お客を接待するための宮廷音楽家を雇っていた訳である。大司教といっても、世俗の小封建君主と考えた方が分かりやすい。

モーツァルト親子を自由に旅行させてくれた大司教が亡くなり、後任となったヒエロニムス・コロレド大司教は、秩序第一の官僚的な君主だったようである。当然のことながら、わがままなモーツァルトはこの大司教と反りが合わなくなり、職を辞して再び旅に出たのだった。1777年21才の時、父は残り母アンナ・マリアが同行する。ミュンヘン、アウクスブルク、マンハイムからパリに至る他流試合と就職活動の旅である。

結論を急ごう。・・・この旅は完全な失敗で、彼は尾羽打ち枯らしてほうほうの体でザルツブルクに舞い戻る。望んでいた職は得られず、マンハイムで見つけた結婚話は父親が猛反対、パリでは前回と違って世間の風は冷たく、さらにここで最愛の母を失う。パリで作曲したアリアを携えて、結婚を申し込むべく立ち寄ったミュンヘンでは、アロイジア・ウェーバーから「定職もない貧乏作曲家」と

相手にされなかった。

「今日の僕には、ただ泣くことしか出来ません。・・・お父さん、どうかすぐ返信のお手紙で僕を慰めて下さい。・・・」

なんと、哀れなモーツァルトの姿が眼に浮かぶことか。

しかも彼の帰郷を待っていたのは父親の計らいとはいえ、あの大嫌いな大司教への宮仕えであった。刺激の乏しい田舎町、尊大な貴族、のしかかる借金の返済、何よりも聞く耳持たぬ人々のために作曲し演奏しなければならないバカバカしさ。後にウィーンからの手紙で、「ザルツブルクでは椅子やテーブルに聞かせているようなものです」と述べている。肉体的にも精神的にもメタメタで、作曲のペンなど真面目に握れなかったと思われるのに、なんとこのときモーツァルトは素晴らしい曲を我々に残してくれているのである。「戴冠式ミサ」(K. 317)、贅沢なバックグラウンド・ミュージックであるディヴェルティメントニ長調(K. 334)、ヴァイオリンとヴィオラのための協奏曲(K. 364)などなど・・・

現し身の自分とは異なる、厳然としたプロとしての自分が別に存在していたのではないだろうか?・・・私にはこのように思えてならないのである。このように考えないと、暇があればお○をなめろとか、○○コだ○○コだと騒いでいた人間が、あの清澄な音楽を作れる理由が分からなくなるからである。



(ニュンフェンブルクの離宮)

★ 独立自尊の道

吉報はミュンヘンから来た。バイエルン選帝候としてミュンヘンに移っていたカール・テオドール王からのオペラの注文である。恐らく、先の旅行のときに親しくなった宮廷音楽家たちが運動してくれたのだろう。テーマは「イドメネオ」、選帝候からのお呼出とあらば大司教も休暇を認めざるを得なかった。彼は精根を込めてこのオペラ・セリア（伝統的な正式の形式を守ったオペラ）を書き、成功、選帝候の賞賛を受ける。しかし、休暇期限を守らなかったため大司教を怒らせる。彼はウィーンに呼びつけられ、大司教宿泊の「ドイツ館」に閉じこめられて音楽の接待を命じられる。皇帝が出席されるような演奏会にお声が掛かっているのに出演させて貰えず、大司教との間は次第に切迫の度を増してついに衝突、しかし、彼は自分で自立出来る自信があったので独立自尊の道を選ぶ。最後は「ドイツ館」の玄関で、仲介役のアルコ伯爵という人に、お尻を蹴飛ばされて追い出されたというから、相当に相手を興奮させたものと思われる。

しかし、この独立があったればこそ、モーツァルトの音楽は大成するのである。自由な音楽家になった彼は、丁度、水を得た魚のように生き生きと仕事にかかり、ピアノ教師、演奏会、作曲で多忙な日を送る。待望の、オペラの注文も舞い込むようになる。最初はドイツ語による「後宮よりの逃走」である。トルコ風の序曲や行進曲、アリアや重唱も青春の喜びに満ち溢れる見事な出来ばえに、ヨーゼフ二世も激賞した。

それもそのはず、偶然とは言いながらモーツァルトはこのとき、劇中の主人公と同名のウェーバー家の三女、コンスタンツェと恋仲になっていたからである。父レオポルトは、下宿の未亡人の策略に乗せられていると反対したが、ヴォルフガングはもう父のいいなりにはならなかった。

1782年8月4日、父親は欠席のまま聖シュテファン寺院で結婚式を挙げる。

モーツァルト26才の時であった。

（ウィーンの聖シュテファン寺院）



この時期モーツァルトの主催する予約演奏会は評判が良く、経済的にも精神的にも最も好調のときを迎える。ハイドンに捧げた6曲の弦楽四重奏曲（ハイドンセット）、数々のピアノ協奏曲、中でもフリーメーソンに加入してから作曲する20番から23番のピアノ協奏曲は、大げさに言えば、人類に凄いものを残してくれたと私は思うのである。

息子の招きに応じてウィーンにやって来たレオポルトは、娘ナンネルに手紙を送って、新作のピアノ協奏曲（20番、ニ短調、K. 466）の見事な出来栄を伝え、ヨーゼフ・ハイドン氏にこう言われたと喜びを隠さない。

「私は神に誓って正直に申し上げますが、あなたの御子息は、私が知る最も偉大な作曲家です。御子息は趣味が良く、その上、作曲に関する知識を誰よりも豊富にお持ちです」

★ オペラで勝負

18世紀の音楽の主流はオペラであった。宮廷にオペラ劇場があるかどうか、その領主の力を計る尺度になっていた。オペラ劇場を持つには、単に建物だけでなく、それに付帯する人々を養っていく財政の余裕がなければならなかった。

つまり、イタリア人の歌手、イタリア人を中心とするオーケストラ、作曲家、舞台装置や演出の人を常に備っておかなければならなかった。そして他国の領主や選帝侯などの訪問を受けたときは、オペラを見せるのが最高の接待で、それが出来ないザルツブルクなどでは、演奏会形式でやらざるを得なかったのである。音楽の才能にかけては絶対の自信を持っていた我がモーツァルトは、当然のこととしてオペラに挑戦する。

しかし、イタリア人ではないというだけで、ドイツ系の彼はハンデを背負わされ、優れた台本を手に入れるための苦労は並大抵ではなく、また上演に漕ぎつけるまでに多くのイタリア系の宮廷音楽家の反対を乗り越えなければならなかった。しかし、マリア・テレジアの息子、啓蒙君主として有名なヨーゼフ二世は、珍しくモーツァルトの応援をしてくれたし、台本家のロレンツォ・ダ・ポンテという少々気まぐれなイタリア人が、「フィガロの結婚」の上演許可を皇帝から取り付けてくれるラッキーにも恵まれる。もともと反体制思想ありとして、上演禁止になっていたドラマであるが、モーツァルトはこれを読んで面白いと、飛びついたのであった。機略をめぐらし、貴族を手玉にとる快男児フィガロに、彼は自分の代弁者を見る思いがしていたのかも知れない。1785年の秋から翌年の春にかけて、モーツァルトは他の仕事を放り出してフィガロの作曲に集中する。

1876年5月1日、反対派のさまざまな抵抗にも拘らず、「フィガロの結婚」は皇帝の支持で上演の初日を迎えることが出来た。幕が開くと、すぐに流れ出し次から次へと溢れてくる美しい音楽は、初日の客を圧倒した。その美しさに酔いしれて、歌ごとにアンコールを求める人々と、反対派のヒストに包まれて、二倍の時間がかかったといわれている。従来アリア中心であったオペラが、二重唱、三重唱、あるいは見事な六重唱まで登場する「フィガロ」は、たしかに斬新かつ魅力的であった。

しかし、曲が良ければ良いほど反モーツァルト派の抵抗を招いて、ウィーンでは11回の公演で姿を消す。彼は「フィガロ」で勝負し、

音楽で見事な勝利を納めながら、社会的、経済的に敗退して行ったのであった。

しかし、思わぬ朗報がプラハから来る。フィガロが大ヒットして、ぜひ作曲者を招きたいというのである。1787年の正月、プラハに赴いたモーツァルトは道を行く多くの人々が、「もう飛ぶまいぞこの蝶々」の歌を口ずさむのを聞いて感激する。やがて、モーツァルトを評価するプラハからの注文で、このあとで「ドン・ジョバンニ」が生まれるのである。さらに1789年の後半、皇帝から待望のオペラの仕事が依頼された。ダ・ポンテの台本による「コシ・ファン・トゥッテ」（女はみんなこうしたもの）であるが、この興味尽きない喜劇オペラも、当時は、「馬鹿げた」とか「不道德」とか言われて評価されず、彼の借金はどうも増え続ける。最後のオペラは1791年9月完成の「魔笛」、既に金持ちからの注文を期待出来なかったモーツァルトは、田舎歌芝居シカネーダー一座からの注文に応じる。筋もチグハグ、学芸会のように動物の登場するこのオペラは、台本の拙さにも拘らず、素晴らしい音楽の力で、永遠に人類の宝として残されることになる。そして、「魔笛」の完成2カ月後の12月5日、友人に「魔笛」の歌を口ずさんで貰いながら、モーツァルトは35才の生涯を閉じたのであった。



(突き当たりがフィガロ・ハウス)

★ おわりに

もう数年前のことになるが、N自動車のH副社長さんと歓談しているとき、ふとしたことで音楽の話になった。

私 「Hさん、モーツァルトは好きですか？」

Hさん「モーツァルトから始まってモーツァルトに終わると言うでしょう。私は家内に、自分が死ぬ時はモーツァルトのピアノ協奏曲ニ短調をかけてくれ、と言っているんですよ」

私 「あの20番ケッヘル466番ですか？」

Hさん「あれを聞きながら死ねれば、満足だと思うんですよ」



この話を聞きながら、モーツァルトはHさんの生活の中に完全に入り込んでいるのだなと思った。羨ましいなとも思ったものだった。

5月11日、モーツァルト回顧の旅に出た私は、ウィーン劇場の前で沢山の人から「お手持ちの余分はありますか？」と声を掛けられ、モーツァルトの音楽に改めて脱帽する想いであった。そして、クラウディオ・アバドの指揮するウィーン国立歌劇団の「フィガロの結婚」は予想に違わず見事なものだった。



モーツァルトを産み、育てたオーストリアという国は、何という美しく、清々しい国だと感心した。この国は、後世に残すべきものを大事に大事にしているなと思った。

以上(1991.6.14)

(ザルツカンマーグートにて)